

# 記紀神話を読みなおす (3)

## —— (II) 国生み神話をめぐって ——

大内建彦

### 1 国生み神話の範囲をめぐって

前回までの神々の系譜のみからなる創世神話の分析を一応きりあげて、創世型神話としての国生み神話本論の分析に移りたい。くり返して述べてきたように、この国生み神話に先だつイザナキ・イザナミ対偶神の誕生までを「神世七代」と括り出して終るほぼ神々の系譜のみからなる神話部分は、その原像ないし原態の孕む神話的イメージなり意味なりはさておきその実態は、自然の生成を觀念し世界の創造を語るといった本格的な神話からはほど遠いものであった。それは具体的具象的な神話の展開というよりはむしろ、おぼろげながら時空のはじまりとその経過をとき、創造の主役たるイザナキ・イザナミを導き出し、以下の本格的な創造神話のはじまりへとつなげるためのいわばイントロダクション的性格を帯びたものとしてあつた。この冒頭部分にみら

れる記の高度に政治的イデオロジカルな演出手法については、上で詳述したので改めてくり返さないが、キ・ミ二神の出現以降、記紀ともに世界の創造的進化にかかわるあらゆる実質的な行為行動に期する点では大むね共通している。そのごとく記紀双方とも、オノゴロ島の創成にはじまり大八島国の生成へさらに山川草木の具備へとその創造的世界をダイナミックに展開してゆく。従つてまず何よりもこのいわゆるイザナキ・イザナミ神話群の神話自体の複合性ともどもキ・ミ二神の性格そのものの複合性をこそ思うべきである。なぜなら、記紀テキスト内部には体系神話とすべく拉し来られた様々に異種の神話が複合混在しており、時に均質的均斉化してみえようともそれゆえにこそ巧妙に構成構造化されているのであつて、基本的にはどの要素がどの神話に固有であるかという還元的視座が不可欠である。そうした姿勢を堅持し貫きとおすことこそが、その歴史的体系化のうちに潜むイデオロギーを最も根

源のかつ先鋭的に抉り出すことにつながるからである。さしあたってイザナキ・イザナミ神話の前半部を分析対象とするが以下では様々にそうした具体的検証がなされてゆくはずである。

ところで、当該部分のタイトルとした国生み神話の覆う範囲について一言しておきたい。とりあえずここではキ・ミ二神が大八島を生み終えるまで、この八島に加えて記では六島、紀本文では三島ばかり追加記事が見られるが、これらを含む部分を一応国生み神話をカバーする部位とみて話を進めたい。すなわちキ・ミ二神の天空あるいは空中におけるオノゴロ島の生成、そこへの降下およびその島上での二神の聖婚、そしてそれにつづく大八島を中心に列島の生成を語る部分までをその扱う範囲としておきたい。記はこの国生みを終えたところで次は神生みとはつきり文脈を違えているし、紀本文でも又、大八島の誕生と三島追加記事を終えたところで別伝としての一書挿み込み、直接つながる次の第五段本文では山川草木を生むと別の伝承へと移行しており、記紀両伝承ともこの大八島を生み終えた所で一区切りつけることに何ら支障のないことを明瞭に示している。

ところで、扱う範囲それ自体はそれでいいとして、具体的に分析をはじめめるにあたって、この箇所はこの部分に限って分析をすませてこゝと足れりとしえぬ大きな難問があることに注意を促しておきたい。つまりこの部分の分析に先だって確認しておくべき問題点が大きくいつて二つある。一つはいうまでもなく、「ヒルコ」の出現箇所をめぐって記紀伝承間に大きくないちがいがみられるという点である。記では

「ヒルコ」は有名な生み損じ型として早々にこの部分に登場するが、紀本文では、これより先の神生みの条でいわゆる三貴子の誕生に列して出現させており、この重要かつキーとなる神話要素が相互で大きくことなる場所にたちあらわれることをどう解くかという問題がある。従って、相互の分析ともからむので、直接の対象ではないが紀の五段落も資料として掲出しておく必要があるということ。もう一つは、この「ヒルコ」出現の双方の位置の違いとも絡んで、記紀伝承間の対偶神イザナキ・イザナミ像上に決定的なちがいを認めざるを得ないという点である。つまり、紀本文がこの国生みにつづいてそのままぐに三貴子出生の神話へと直結するのに対して、記はその三貴子の出生に至るまでにイザナミの死を語り、その亡き妻を訪ねて夫イザナキが黄泉国まで出かけてゆくという膨大な神話を挿み込んでいるからである。紀本文にはみられぬ伝承をとり込み、あえて大きく迂回しつつ体系内に持ち込もうとした記の神話上の意図とは何か。あるいは逆に、そうした伝承を全く無視してかかる紀の体系化の企図とはいかなるものなのか。こうした記紀伝承間の大きな落差の中から派生してくるキ・ミ二神像の決定的な違いについて、十分すぎる願慮が払われてしかるべきことである。

ついでに言っておけば、記がミ神が死したしたことによって、記の三貴子出生がキ神一神による単性化生となることは自明で、夫婦そろって生みなすとする紀との伝承間で、三貴子出生の背景をなすシチュエーションが根本的に違うものとして現象している点も要注意であ

る。しかもこうした決定的に異なる神話状況の中で、皇祖神アマテラスがつづいてスサノヲが生みなされ、この姉弟二神がキ・ミ二神にあって代わって神話の主人公としての地位と役割をひきついでゆく。こうしたキ・ミ二神にまつわりつく諸々の全体像については、キ・ミ二神がアマテラスとスサノヲにその主人公としての立場をすっかり明け渡し、体系神話内から退場したあとで改めて検証を加えるべきことだとしても、こうした神話要素の所載上の位置のちがいがあるいは、それに伴う状況のへだたりが、キ・ミ二神の神格なりイメージ上に大きな差隔をもたらすことと深く相関するという点にも十分留意してかかる必要がある。

少々先の問題へと踏み込みすぎたきらいもあるが、右にのべたような神話文脈のちがいの中から立ちあげられてくるキ・ミ二神像のイメージの相違と、それを深層において支えているキ・ミ二神の神話のそれぞれの複合性について、それを具体化しつつ若干の示唆を与えておきたい。結論を先だててみておくことが問題のありかを明瞭にし、その解きほぐしの道筋を効率よくより道理だてて示唆してくれることが多々あるからでもある。たとえば、キ・ミ二神がそろって島生みなり国生みなりをし更に、山川草木から日月まで産みなしたとするからには、この対偶神上に世界巨人なり宇宙巨人としての男女神のイメージを付与したくなるのは自然な想像として許されるであろう。事実、宇宙のはじまりを説く世界の多くの神話の古層にはそうした活動をし活躍する巨人神がしばしば見受けられるが、そうした神格に準じる性格

をこのキ・ミ二神もその一面として保持していることは明らかだといわざるをえないであろう。

ところで紀においては、オノゴロ島生成以降このキ・ミ二神は全伝承を通じて突如として陰陽神と呼び換えられ、このありかたは、神話が次の神生み条に移行するまで一貫して踏襲される。とするならばこの陰陽神はキ・ミ二神とどういう関係にあるか、キ・ミ二神ではなく、陰と陽の神々の事蹟だとして神話を語ろうとする紀の意図するところは何か。このことは後に詳述するが、オノゴロ島を創造したあと神話が突如として、件の陰陽二神に変わり、この二神が「天柱」を廻ることからはじまることに象徴的に示されているように、これはこれで独立した一つの神話類型を形づくるものとしてあったと思える。すなわち広く中国の陰陽思想にみられるように、おそらく宇宙原理を體現するある種抽象的な巨人神としての陰陽神が、宇宙の中軸たる「天柱」を交互にめぐりあい和合することで国土としての大地を創成したのだとする、中国古来の思想に根ざす神話であったと思える。陰陽神はそうしたレヴェルでのキ・ミ二神のいかえとして現象している。いかえればキ・ミ二神はこうした中国思想に基づく宇宙巨人としての男女原理を體現する存在とみなしてよいということでもあろう。これがキ・ミ二神に潜む固有の神格の第一点である。

次には、このキ・ミ二神の身の上について執拗に男女の性器の仕組みのちがいを強調してみせ、「性」のレクチャーともいえるべき交道の起源をくぐりだしく述べたてあるあり方は、この二神が人類の始祖とし

である種人間と等身大の存在であることを説示しようとしてはいないか、あるいは、神でありつつ限りなく人間に近い存在であることをその側面に揺曳させてはいないかという点である。このことは記が交合が一旦は失敗しその結果「ヒルコ」を出産するが、もう一度やり直すことによって健全児を生んだと伝えること、記のように「ヒルコ」を生んだとはしないが、にもかかわらず紀が「やり直し」要素を根づよく残存させているありかたにも、人間の存在であることを彷彿とさせるに足るものを十二分にただよわせていよう。このことは「ヒルコ」要素を論じる際に改めてふれるが、如上の人間大的な神話諸要素は「兄妹型相姦始祖神話」がかつて確実に存在したことを証す状況証拠を構成するものと断じてよい。「ヒルコ」を中核要素とする「兄妹型始祖神話」の存在の有無についてはすでに第二次大戦後来五〇年以上の研究の積み重ねがあるが、益田勝実の説得的で周到な紹介があったように、この「兄妹型人祖神話」の存在をここにはつきりあると断言しておきたい。<sup>3</sup>キ・ミ二神がセキレイなる鳥に交合の方法を学んだとする紀の一書の所伝も、ある島に二人とり残された二人の幼い男女を想像させ、その種の伝承にまつわる人為的あるいは人間生活圏的側面をうかがいうるよきよすがともなる。ともあれ、この人間的で兄妹的な存在であること、これがキ・ミ二神に固有の神格であったと思えることの第二点目である。

さらには又、記型のミ神の死亡のあとをうけてキ神が単独化生によつて三貴子を生みなす話型についていえば、これについてもしばしば

中国伝来の盤古神話との類縁性がとりざたされるが、このキ神像としては性を超越した単独の宇宙巨人といったイメージがまつわりついてみえる。と同時に、盤古神話のうち死体化生型によらないこのイザナキ神話は、彼の両眼から日月が誕生したとするが、そこでは天空神的天父的な性格を帯びたものとしてたちあらわれる。<sup>4</sup>この天空的天父的性格をも認めうるとするならば、ここからひるがえつてその対偶をなすミ神の上に大地神大地母神の性格も揺曳するかのごとく見えてこよう。実際、自ら火神を産むことによつて死亡し、地下の国黄泉へと赴くとする筋立ての中に大地母神としての性格をみてとることも可能だろう。紀の例の淡路島を「胞」とするつまり、島を胎盤なり子宮なりに仕立てるといふ所伝にもある種、大地を女体として見たてるといった觀念がほの見えることについては既に白鳥庫吉の言及もある。事実このあたりの神話的展開を根拠に、このキ・ミ二神の上に天父地母神話としての性格を認取するのは、松村武雄をはじめとして神話研究者にも数多い。そして、中国の古文獻に通暁する中国学者のほとんどがキ・ミ二神の神格にそうした一面を認めていることは注目に値する。<sup>5</sup>

このようにみえてくると、ざっと数えあげてみるだけでもキ・ミ二神には、抽象的な陰陽神、あるいは世界巨人といった男女神、天父地母の巨人神はたまた人類始祖の兄妹神といった四通りばかりの異つた神格が重層化し構造化していることがたちまちに想像しうる。逆のいい方をすれば、これら複数の神話群を統べ貫く主人公としてキ・ミ対偶

二神が造型されたち上げられているわけだが、そのうちに内在する個々の神話を浮き彫りにすることによって、キ・ミ二神にまつわりつくこうした複相的性格を解きほぐすことができる。そうした問題を解く鍵が「オノゴロ島」の生成、「天柱めぐり」や「ヒルコ」生み、あるいは淡路島を「胞」とするというようなキーをなす要素に象徴的かつ集約的にあらわれていると思える。こうしたキーをなす要素がそれぞれの神話に固有のものであり、どれを本態とする神話内でのいかなる機能をはたすものとしてあつたのかを還元的に徹底して分析検証しつつ、国生み神話の内実とその構成を相対化してみよう。

さて、このオノゴロ島の生成から国生みの創成を語る部分を分析するにあたって例のごとく記紀両伝承の原資料を掲出することからはじめたい。「四一本文」あるいは「四一」は「紀四段本文」「紀四段第一の一書」であることは前出のとおりである。記紀の複数の異伝を見通しよく比較対照する意味で、この神話部分をオノゴロ島の生成を語る前半部と、それにつづくその島上での二神の聖婚および大人島の生成を語る後半部との二つに分けて掲出しておきたい。上述のように、「国生み」につづく「神生み」神話の部分は一線を画して別に扱うこととするが、「ヒルコ」誕生の異伝部分については当然比較資料として不可欠であるので、五一本文、五一2として先取りして摘出しあわせて併載しておこう。従前どおり記紀ともに岩波文庫版の訓み下し文によっている。

記 ここに天つ神諸の命もちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱

の神に、「この漂へる國を修め理り固め成せ」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下ろして書きたまへば、鹽こをろこをろに書き鳴して引き上げたたまふ時、その矛の末より垂り落つる鹽、累なり積もりて島と成りき。これ淤能基呂島なり。

四一本文 伊奘諾尊・伊奘冉尊、天浮橋の上に立たして、共に計ひて曰はく、「底下に豈國無けむや」とのたまひて、廻ち天之瓊矛を以て、指し下して探る。是に滄溟を獲き。其の矛の鋒より滴瀝る潮、凝りて一の嶋に成れり。名けて礮馭慮嶋と曰ふ。

……(中略)……即ち対馬嶋、老岐嶋、及び処、処の小嶋は、皆是潮の沫の凝りて成れるものなり。亦是、水の沫の凝りて成れるとも曰ふ。

四一 一書に曰はく、天神、伊奘諾尊・伊奘冉尊に謂りて曰はく、「豊葦原の千五百秋の瑞穂の地有り。汝往きて脩すべし」とのたまひて、廻ち天瓊矛を賜ふ。是に、二の神、天上浮橋に立たして、戈を投して地を求む。因りて、滄海を画して、引き挙ぐるときに、即ち戈の鋒より垂り落つる潮、結りて嶋と為る。名けて礮馭慮嶋と曰ふ。

四一2 一書に曰はく、伊奘諾尊・伊奘冉尊、二の神、天霧の中に立たして曰はく、「吾、國を得む」とのたまひて、乃ち天瓊矛を以て、指し垂して探りしかば、礮馭慮嶋を得たまひき。則ち矛を

抜げて、喜びて曰はく、「善きかな、国の在りけること」とのたまふ。

四―3 一書に曰はく、伊奘諾・伊奘冉、二の神、高天原に坐し、まして曰はく、「当に国有らむや」とのたまひて、及ち天瓊矛を以て、碓敷慮嶋を画り成す。

四―4 一書に曰はく、伊奘諾・伊奘冉、二の神、相謂りて曰はく、「物有りて浮膏の若し。其の中に蓋し国有らむや」とのたまひて、及ち天瓊矛を以て、探りて一の嶋を成す。名けて碓敷慮嶋と曰ふ。

\*〔参考〕

\*四―本文 二の神、是に、彼の嶋に降り居して、因りて共為夫婦して、洲国を産生まむとす。便ち碓敷慮嶋を以て、國中の柱として、……………(中略)……………産む時に至るに及びて、先づ淡路洲を以て胞とす。意に快びざる所なり。故、名けて淡路洲と曰ふ。

\*四―6 一書に曰はく、一二の神、合為夫婦して、先づ淡路洲・淡洲を以て胞として、大日本豊秋津洲を生む。次に伊予洲。次に筑紫洲。次に億岐洲と佐度洲とを双生む。

\*四―8 一書に曰はく、碓敷慮嶋を以て胞として、淡路洲を生む。

\*四―9 一書に曰はく、淡路洲を以て胞として、大日本豊秋津洲を生む。

記

その島に天降りまして、天の御柱を見立て、八尋殿を見立て

たまひき。ここにその妹伊邪那美命に問ひたまはく、「汝が身は如何か成れる。」ととひたまへば、「吾が身は、成り成りて成り合はざる處一處あり。」と答へたまひき。ここに伊邪那岐命詔りたまはく、「我が身は、成り成りて成り餘れる處一處あり。故、この吾が身の成り餘れる處をもちて、汝が身の成り合はざる處にさし塞ぎて、國土を生み成さむと以爲ふ。生むこと奈何。」とのりたまへば、伊邪那美命、「然善けむ。」と答へたまひき。ここに伊邪那岐命詔りたまひしく、「然らば吾と汝とこの天の御柱を行き廻り逢ひて、みとのまぐはひ爲む。」とのりたまひき。かく期りて、すなわち「汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむ。」と詔りたまひ、約り竟へて廻る時、伊邪那美命、先に「あなにやし、えをとこを。」と言ひ、後に伊邪那岐命、「あなにやし、えをとめを。」と言ひ、各言ひ竟へし後、その妹に告げたまひしく、「女人先に言へるは良からず。」とつげたまひき。然れどもくみどに興して生める子は、水蛭子。この子は葦船に入れて流し去てき。次に淡島を生みき。こも亦、子の例には入れざりき。ここに二柱の神、議りて云ひけらく、「今吾が生める子良からず。なほ天つ神の御所に白すべし。」といひて、すなわち共に參上りて、天つ神の命を請ひき。ここに天つ神の命もちて、太占に卜相ひて、詔りたまひしく、「女先に言へるによりて良からず。また還り降りて改め言へ。」とのりたまひき。故ここに反り降りて、更にその天の御柱を先の如く往き廻りき。ここに伊邪那岐命、先

に「あなにやし、えをとめを。」と言ひ、後に妹伊邪那美命、「あなにやし、えをとこを。」と言ひき。かく言ひ竟へて御合して、生める子は、淡道の穂の狭別島、次に伊豫の二名島を生みき。この島は、身一つにして面四つあり、面毎に名あり。故、伊豫國は愛比賣と謂ひ、讚岐國は飯依比古と謂ひ、粟國は大宜都比賣と謂ひ、土左國は建依別と謂ふ。次に隱伎の三子島を生みき。亦の名は天之忍許呂別。次に筑紫島を生みき。この島もまた、身一つにして面四つあり。面毎に名あり。故、筑紫國を白日別と謂ひ、豊國は豊日別と謂ひ、肥國は建日向日豊久土比泥別と謂ひ、熊曾國は建日別と謂ふ。次の伊伎島を生みき。亦の名は天比登都柱と謂ふ。次に津島を生みき。亦の名は天之狹手依比賣と謂ふ。次に佐度島を生みき。次に大倭豊秋津島を生みき。亦の名は天御虚空豊秋津根別と謂ふ。故、この八島を先に生めるによりて、大八島國と謂ふ。

然ありて後、還ります時、吉備兒島を生みき。亦の名は建日方別と謂ふ。次に小豆島を生みき。亦の名は大野手比賣と謂ふ。次に大島を生みき。亦の名は大多麻流別と謂ふ。次に女島を生みき。亦の名は天一根と謂ふ。次に知訶島を生みき。亦の名は天之忍男と謂ふ。次に兩兒島を生みき。亦の名は天兩屋と謂ふ。

四一本文 二の神、是に、彼の嶋に降り居して、因りて共為夫婦して、洲國を産生まむとす。便ち磯馭慮嶋を以て、國中の柱として、陽神は左より旋り、陰神は右より旋る。国の柱を分巡りて、同し

く一面に会ひき。時に、陰神先づ唱へて曰はく、「意哉、可美少男に遇ひぬること」とのたまふ。陽神悦びずして曰はく、「吾は是男子なり。理当に先づ唱ふべし。如何ぞ婦人にして、反りて言先つや。事既に不祥し。以て改め旋るべし」とのたまふ。是に、二の神却りて更に相遇ひたまひぬ。是の行は、陽神先ず唱へて曰はく、「意哉、可美少女に遇ひぬること」とのたまふ。因りて陰神に問ひて曰はく、「汝が身に何の成れるところか有る」とのたまふ。對へて曰はく、「吾が身に一の雌の元といふ処有り」とのたまふ。陽神の曰はく、「吾が身に亦雄の元といふ処有り。吾が身の元の処を以て、汝が身の元の処に合せむと思欲ふ」とのたまふ。是に、陰陽始めて違合して夫婦と為る。

産む時に至るに及びて、先づ淡路洲を以て胞とす。意に快びざる所なり。故、名けて淡路洲と曰ふ。廼ち大日本豊秋津洲を生む。次に伊予二名洲を生む。次に筑紫洲を生む。次に億岐洲と佐度洲とを双生む。世人、或いは双生むこと有るは、此に象りてなり。

次に越洲を生む。次に大洲を生む。次に吉備子洲を生む。是に由りて、始めて大八洲國の号起れり。即ち對馬嶋、壹岐嶋、及び処、処の小嶋は、皆是潮の沫の凝りて成れるものなり。亦是、水の沫の凝りて成れるとも曰ふ。

四一 二の神、彼の嶋に降り居して、八尋之殿を化作つ。又天柱を化豎つ。陽神、陰神に問ひて曰はく、「汝が身に何の成れるところか有る」とのたまふ。對へて曰はく、「吾が身に具り

成りて、陰の元と称ふ者一処有り」とのたまふ。陽神の曰はく、「吾が身に亦具り成りて、陽の元と称ふ者一処有り。吾が身の陽の元を以て、汝が身の陰の元には合せむと思欲ふ」と、云爾。即ち天柱を巡らむとして約束りて曰はく、「妹は左より巡れ。吾は当に右より巡らふ」とのたまふ。既にして分れ巡りて相遇ひたまひぬ。陰神、乃ち先づ唱へて曰はく、「妍哉、可愛少男を」とのたまふ。陽神、後に和へて曰はく、「妍哉、可愛少女を」とのたまふ。遂に為夫婦して、先づ蛭児を生む。便ち葦船に載せて流りてき。次に淡路洲を生む。此亦児の數に充れず。故、還復りて天に上り詣て、具に其の状を奏したまふ。時に天神、太占を以て卜合ふ。乃ち教てて曰はく、「婦人の辞、其れ已に先づ揚げられたるか。更に還り去ね」とのたまふ。乃ち時日を卜定へて降す。故、二の神、改めて復柱を巡りたまふ。陽神は左よりし、陰神は右よりして、既に遇ひたまひぬる時に、陽神、先づ唱へて曰はく、「妍哉、可愛少女を」とのたまふ。陰神、後に和へて曰はく、「妍哉、可愛少男を」とのたまふ。然して後に、宮を同くして共に住ひて児を生む。大日本豊秋津洲と号く。次に淡路洲。次に伊予二名洲。次に筑紫洲。次に億岐三子洲。次に佐度洲。次に越洲。次に吉備子洲。此に由りて、之を大八洲国と謂ふ。

四一五 一書に曰はく、陰神先づ唱へて曰はく、「美哉、善少男を」とのたまふ。時に、陰神の言先づつるを以ての故に、不祥しとし

て、更に復改め巡る。則ち陽神先づ唱へて曰はく、「美哉、善少女を」とのたまふ。遂に合交せむとす。而も其の術を知らず。時に鶴鶴有りて、飛び来りて其の首尾を揺す。二の神、見して学ひて、即ち交の道を得つ。

四一六 一書に曰はく、二の神、合為夫婦して、先づ淡路洲・淡路洲を以て胞として、大日本豊秋津洲を生む。次に伊予洲。次に筑紫洲。次に億岐洲と佐度洲とを双生む。次に越洲。次に大洲。次に子洲。

四一七 一書に曰はく、先づ淡路洲を生む。次に大日本豊秋津洲。次に伊予二名洲。次に億岐洲。次に佐度洲。次に筑紫洲。次に壹岐洲。次に对馬洲。

四一八 一書に曰はく、磯馭慮嶋を以て胞として、淡路洲を生む。次に大日本豊秋津洲。次に伊予二名洲。次に筑紫洲。次に吉備子洲。次に億岐洲と佐度洲とを双生む。次に越洲。

四一九 一書に曰はく、淡路洲を以て胞として、大日本豊秋津洲を生む。次に淡洲。次に伊予二名洲。次に億岐三子洲。次に佐度洲。次に筑紫洲。次に吉備子洲。次に大洲。

四一十 一書に曰はく、陰神先づ唱へて曰はく、「妍哉、可愛少男を」とのたまふ。便ち陽神の手を握りて、遂に為夫婦して、淡路洲を生む。次に蛭児。

五一 本文 次に海を生む。次に川を生む。次に山を生む。次に木の祖句々廻馳を生む。次に草の祖草野姫を生む。亦是野槿と名く。既



胞		ヒルコの要素			記		記		
水蛭子 (淡島)	蛭児 (淡洲)	日神 月神 蛭児 素戔嗚	日 月 蛭児 素戔嗚	天照大御神(左目) 月読命(右目) 須佐之男(鼻) ※岐神単独で	大日靈貴(左手鏡) 月神(右手鏡) 素戔嗚(首) ※諸神単独で	淡路洲	淡路洲・淡洲	磯取慮嶋	淡路洲
葦船に入れ て流し去つ	葦船に載せ て流す	三歳脚立たず	三歳脚立たず						
子の例に入 れず	児の数に入 れず	天磐櫂樟船に 載せて風の順 に放ち棄つ	鳥磐櫂樟船に 載せて流の順 に放ち棄つ						

〔表1〕

にして伊弉諾尊・伊弉冉尊、共に議りて曰はく、「吾已に大八洲  
 国及び山川草木を生めり。何ぞ天下の主者を生まざらむ」との  
 たまふ。是に、共に日の神を生みまつります。大日靈貴と号す。  
 ……(割注一部略) ……一書に云はく、天照大神といふ。一書  
 に云はく、天照大日靈尊といふ。此の子、光華明彩しくして、  
 六合の内に照り徹る。 ……(中略) ……故、天柱を以て、  
 天上に挙げ、次に月の神を生みまつります。一書に云はく、月  
 尊、月夜見尊、月読尊といふ。其の光彩しきこと、日に  
 亜げり。以て日に配べて治すべし。故、亦天に送りまつる。次に  
 蛭児を生む。已に三歳になるまで、脚猶し立たず。故、天磐櫂  
 樟船に載せて、風の順に放ち棄つ。次に素戔嗚尊を生みまつり  
 ます。一書に云はく、神素戔嗚尊、速素戔嗚尊といふ。此の神  
 勇悍くして安忍なることあり。且常に哭き泣つるを以て行とす。  
 ……(第二) ……一書に曰はく、日月既に生れたまひぬ。次に蛭児を生む。此  
 の児、年三歳に満りぬれども、脚尚し立たず。初め、伊弉諾・  
 伊弉冉尊、柱を巡りたまひし時に、陰神先づ喜の言を発ぐ。既  
 に陰陽の理に違へり。所以に、今蛭児を生む。次に素戔嗚尊を  
 生む。此の神、性悪くして、常に哭き悲むことを好む。国民  
 多に死ぬ。青山を枯に為す。 ……(中略) ……次に鳥磐櫂  
 樟船を生む。輒ち此の船を以て蛭児を載せて、流の順に放ち棄つ。

〔表2〕

島の呼称・生り出での順							記
淡道之穗之狭別嶋	伊豫之二名嶋	隠伎之三子嶋	筑紫嶋	伊伎嶋	津嶋	佐度嶋	大倭豊秋津嶋
大日本豊秋津洲	伊豫之二名洲	筑紫洲	億岐洲	佐度洲	越洲	大洲	吉備子洲
大日本豊秋津洲	淡路洲	伊豫二名洲	筑紫洲	億岐三子洲	佐度洲	越洲	吉備子洲
大日本豊秋津洲	伊豫洲	筑紫洲	億岐洲	佐度洲	越洲	大洲	子洲
淡路洲	大日本豊秋津洲	伊豫二名洲	億岐洲	佐度洲	筑紫洲	对馬洲	洲
淡路洲	大日本豊秋津洲	伊豫二名洲	筑紫洲	吉備子洲	億岐洲	佐度洲	越洲
大日本豊秋津洲	淡路洲	伊豫二名洲	億岐三子洲	佐度洲	筑紫洲	吉備子洲	大洲

## 2 オノゴロ島の生成

——原古の島あるいは神話舞台の設定

先掲の訓み下し文による記紀両伝承の比較資料からも明らかのように、オノゴロ島の生成を語る異伝は記、四一本文、1、2、3、4と計六個を数える。オノゴロ島は、記では「淤能基呂」島と表記され、紀では「礮馭慮」島とあって、ほかの全ての一書とも統一してこの表記がなされている。オノゴロ島なる架空とおぼしき呼称とともに記紀両書がこうした難字表記をあえて試行していることの意味をこの際問うてみることもまんざら意味なしとしないであろう。もう一島ヒルコと親縁関係にあるこれも実在しない島と思われる「淡島」を除いて、他は全て大むね実在が確認しうる島々であり、その表記もほぼ史的な

検証に耐えるものである。こうした点を勘案するだけでもオノゴロ島の非在とその表記の非歴史性は露わであって、この島と他の大八島国以下の島々との異質性はほぼ自明でさえある。

先へと急ぐ前に、簡略ながらこのオノゴロ島神話の展開を確認することから始めたい。記が特異ないわゆる「詔命」型をとることについては後述する。その点をのぞけば記紀の所伝はあらかし次のようなほぼ四つの要素からなるストーリーにまとめうるのではないかと思われる。すなわち、「神世七代」を経、長々とした系譜のはてに虚空に生まれ出たキ・ミ二神は、オノゴロ島をつくり出すべく役目をおって、足場としての神座かみくら「天の浮橋」に立ち、「天のヌボコ」を以って海中を画き探り島作りをはじめめる。その先の島作りに関しては多少の異同が認められるものの、キ・ミ二神によって作り出されるこのオ

ノゴロ島は、以下の神話展開からも明らかのように、実体をもつ島ではなくあくまでも仮想の島として、神話を語りうる舞台の設定のために持ち出されており、そのあり方あるいは生成のされ方あるいはその名称、どれをとつても以下の大八島国出みの神話とは全く異質である。

そうしたことの理由としては様々なことが考えられるが、ごくごく妥当な意見としては、広畑のいうように、大八島の生成が生殖によるのに対して、このオノゴロ島は滴る潮が凝って成ったとされ、その生成のあり方が根本的にちがうこと、さらにオノゴロ島が島の成りたちを語る物語によつてつけられた名であるのに、大八島以下の名称はそれとは全く別ものであることなど、容易にあげうると思う。しかし、一読するだけでもこのオノゴロ島の生成と大八島のそれとではいかにも対立的なまでに異質であつて、むしろこのあからさまな対立的性格についてこそ考えを及ぼさねばならぬことを示唆している。

このオノゴロ島と大八島以下の島々との異質性は、逆にはつきりと一線を画し、その差異をむしろ明確にしておく必要さえあつたからではないのか。つまりオノゴロ島は胎生型によらない地上の根源の拠点として、そしてあくまでも神話に不可欠な舞台として、そして大八島という実在の島々が形成されるに及んでひそかに大八島のどこかにその姿を同化させて消え失せうる不可視の架空の島として。その生成のされ方、あるいはそのあらわれ方、どの点をとつてもこのオノゴロ島と大八島とは対立する、そもそもオノゴロ島はそのように存在しかつ、そのように位置づけられている。事実すぐさま後で、記においてこの

オノゴロ島はキ・ミ二神の国生みのための聖婚の場や出産の場へと変化するのだし、紀本文においてはこの島自体が「天柱」そのものへと変容さえしてしまうのである。つまりそうした固有名をもたぬきわだつ不特定性をむしろ積極的に付与することで、オノゴロ島自体の孤立性と架空性をあからさまに確認し、それゆえにこそこの島は不可視の「天柱」そのものへとそのままスムーズに転成しうるのだし、あるいはキ・ミ二神の聖婚と「国」生みの舞台にふさわしい広大な劇的空間へと変容しうる役目も自ら具有するのだ。

ともあれ、以下で詳しく論じるように、この島はとりわけこの「天柱」と不可分の存在で、そうしたあり方なり意味あいを明らかにしてゆく過程で、大八島生み神話以下との根本的なちがいの理由づけもさまざまな面から自ら補強されてゆくはずである。

さて、表記なり文飾上のちがいはさておき、記と四一が同工の伝承であることは一見して明らかであろう。結論を先だてていえば、この二伝承はいわゆる「天神」による「詔命」型をとっており、イザナキ・イザナミに先行する一種の政治的至高神の存在を前提とするそれであつて、他の伝承にはこうした形式が全くみられない。つまり、この記と四一伝承に共通する特異さは、記の創世神話の冒頭部ですでに「高天原」世界が成立し、そこには「アメノミナカヌシ・タカミムスヒ・カミムスヒ」という至高神トリオが存在し、その神たちによつてあることが、「詔命」されるという形式をとることによる。つまりそれは、上でくり返し累述したように、その特権性を前提に天皇権力に

よる統治の合宜性をたえず遡行的に明証しようとする記に特有のアイデア  
オロギー装置に由来するものなのである。このように記には紀本文には見られぬ「天神」による「修理固成」の「詔命」があり、その委任に添えて「天のヌボコ」を賜与するという様式がみられるが、松村武雄の詳論をまつまでもなく、この「詔命」型が後続の莊嚴な「天孫降臨」型を模した二次的類型による所産であることはいうまでもないであろう。

さて、上で遡行的証明装置といったことをここで簡単に神話のストーリー展開に即して辿り直せば以下のように言いうるであろう。すなわち、いわゆる造化三神の直接的意志がキ・ミ二神を代行者としてオノゴロ島を生成せしめ、つづく大八島もその主宰者となるものの誕生もこの特権的な至高神の意志に基づくのであって、加えてキ・ミ二神を仲だちにして大八島国とアマテラスが同一の父母から生まれた同胞であるという血統譜を持ちだすことで、支配の合宜性を更に強化せんとしているのだと。さらに「国生み」から「国譲り」へ、天孫による「国支配」へと、その論理を敷衍しつつ同時に、天皇支配という権能とこの国土との緊密な結びつきをその初源にたちかえつて基礎づけようとしているのである。この「詔命」型なるものが記に特有のアイデアロギー的所産であるとする所以である。

さて、上での若干の考察によって、記と四―一にみられた「天神詔命」型が新しい架上的要素であることを証しえたと思う。とすれば、その付加された要素をとり除いてあらためて六とおりの伝承を整理し

直してみると、このオノゴロ島生成譚は大きく二つの類型に分けうるのではないかと思う。すなわち、キ・ミ二神は「天浮橋」(記・紀本文、四―一)、「天霧」(四―二)、「高天原」(四―三)のどこか、すなわち虚空のどこかに立って、「天のヌボコ」(記は「天沼矛」、紀は「天之瓊矛(戈)」で統一)で海中をかき回して、その矛の先からしたたる潮が凝り固まって島となったとする一種の自然凝固型とでもすべき一類型(記、四―本文、四―一)と、同じくその矛をもって海中をかき回し探りを入れることで島をえたとする攪拌探索型とでもすべき一類型(四―二、四―三)の二つである。

この二類型が従来、神話学者たちによっていわゆる潜水モチーフなり島釣り型なりに比定されてきたことは周知のことだが、ここにもう一つ、記の伝承を抛りどころとする呪言型をあげることが出来る。記では矛をもって海水をかきまわす際「塩こをろこをろに」という表現を書き添えているが、これを「凝れ凝れ」とするような一種の呪言とみる見方で、神あるいは呪者が呪文となえることで島を創造したとするような類型といえようか。しかしこの表現の解釈をめぐっては単に擬音語とみる説もあり確たる仮説ともいいがたい。

ところで、この島作りを媒介する「天のヌボコ」をどう解釈するかについても諸説がある。端的にまとめれば、この矛を単に武器とみるか、あるいは漁具なり祭器なりとみるかということだが、これについては歴史的文化的様相を広く視野に入れて考える必要がある。この列島に鉄文化に先だつて、その弥生期までのかなり長い時期にわた

って、青銅製の鏡や鐸、あるいは剣や戈といったものを祭器とする青銅器文化圏といったものがかなりな広がりを見せていたことはよく知られている。そうした文化的要素を考慮していえば、この「天のヌボコ」は武器型祭器としてある種王権につきもののシンボルの儀器と解してまちがいないと思える。こうした解釈がこの神話の系統なりあるいは成立期などを考える上で一つのヒントなり示唆なりを与えてくれるものとも思えなくもないが、この神話においてはこの矛は王権をシンボライズした普遍的な祭儀器の一種としての性格がつよかつ、神話の上では島を生みなす単なる間接的な媒介物としてあって、それ自体で必須かつ不可欠の要素とはどうも解しえない。

さらに結論づけていえば、このオノゴロ島創成の神話は決して古いものではなく、後続の神話構想に合わせて新たに考案されたものであるらしく、事実そうした点をうかがわせるに足る十分な状況証拠と思しき跡も少なからず存している。記が「詔命」型をとまうことがまづそうである。そしてキ・ミ二神がオノゴロ島の創成をはじめるところにあって虚空に設けた抛り所としての場を記紀ともに「天の浮橋」としている点である。いいかえれば、上の記の「詔命」型と同様に、天空に突如として出現したキ・ミ二神が天降りの途次に立ちよる足場として、天孫降臨神話条の場に倣って「天の浮橋」を設営したのだと。とりあえずは、空中に設けられた「天の浮橋」なる抛り所が、神話のストーリー上遡及的に必要とされ、そのモデルが模索された際、急場しのぎのトボスとして「天の浮橋」が転用されたのだということが確認

できればよい。一書でその場を「高天原」とする発想なども同様である。

ともあれ、こうした意味あいをも参考に、上にあげた三つの類型を更にもう一步詮じつめていえば、これらは「天のヌボコ」を介しつつ無機的に、原初の島としてのオノゴロ島を得たとする斉一的な類型伝承であったという自然な理解にゆきつく。となれば逆に、この異伝の乏しさはこの伝承自体が新しく遡源的に造作されたものであることを自ら暗示しているとも言えよう。従ってこのオノゴロ島神話はある種孤立した性格を強くもつ伝承であって、この点からみても以下の胎生型の大八島生成の神話とはその型式において全く別種のそれであることを明瞭に示しているといえる。

以上述べ来たところからも明らかなように、このオノゴロ島は地上での神話の具体化の端緒をひらき、その展開を可能とするいわば神話の語りを成り立たせるための核<sup>コア</sup>あるいは凝集点として造型されたのであって、そもそも具体的なロケーションをもつものではなかった。キ・ミ二神の大八島の生成という筋立てに合わせて以下二人の結婚にはじまる生活の場として、神話舞台のたちあげとして設定されたものにほかならず、この島の生成に関してはどの神によってどのような状況でいかに生成されたかというような問題は実はどうでもいい領域に属することとしてあった。となれば、いわば主体としてのキ・ミ二神も一神だけでもよかったし、あるいはどちらでなくてもよかったのだし、「天の浮橋」も「天のヌボコ」にしてもある種この神話をオーソ

ライズするためにもち出された聖なる神座なり儀器にすぎないのであって、これらすべてが帰納的に想案された机上の産物であったと断言してよい。こうしたことを神話的に歴史的に人為的に語ろうとするところに、これら潤色のほどこされた所伝は生まれた。

そうした架上部分をとり除いてみると結局、この島の生成は、この島の「自擬」島なる別表記が他の文献にすでに存在するように（仁徳記歌謡、『釈紀』私記曰）、あるいは四一本文の大八島生成の末尾で「対馬」島や「杵岐」島は潮の沫なり水の沫が自然と凝り固まって成ったとする伝承を追加しているように、文字どおり「自擬」説に基づくものであったであろう。何らの意志も介することなく自然な時間的経過とともに海中に水泡が生じるように、進化的に生成された島というのがオノゴロ島の原義であったと思われる。

ここで少々こまかな指摘となるが、「島」表記と「洲」表記のちがいにについても触れておきたい。紀の各伝承においては、オノゴロ島のみが「洲」ではなく「島」表記されていて、いわゆる大八「洲」とははっきりと区別されている。この「島」表記はすぐ上であげた紀四一本文末尾の追加記事の中で「対馬島」「杵岐島」「処々の島」として出てくる以外はすべて「洲」表記されている。この点からみてもオノゴロ島が対馬や杵岐とともに類同の潮沫が凝ってなつたとするような、あくまでも産み出されたとはされない小島と同種の観念をもつて見られており、ここでもオノゴロ島の生成を語る神話が生みなされた大八洲とは別種のなり立ちをもつ別個の独立した神話であったことをはっ

きりと示しているといえる。

さて、次節への橋わたしの意味をも含めて話を一歩進めていえば、このオノゴロ島は二神の聖婚の場あるいは大八島以下の島々を胎生する具体的な場というよりは、この島自体が「天柱」と化して世界の臍、世界の中心としての柱を表象し、陰陽二神がこの周りを廻ることによつて国土を創出するという象徴的な場により深く動機づけられている点を強く喚起しておきたい。次節ではこの「天柱」とそれをめぐる神話的意味について分析を試みたい。

### 3 「天柱」——宇宙の中心あるいは運行の地軸

よく知られているように記紀ともに、キ・ミ二神はオノゴロ島の生成のあとこの島に天降つてすぐに「天の御柱を見立て……」るというふうに展開してゆく。この柱を紀本文では「国中の柱」とし、四一—では「天柱」とし、五一—2では単に「柱」と表記するが、以下頻出にもなう煩雑さをさけるために「天柱」と統一的に表記指示してゆきたい。この「天柱」にかかわる伝承は上述のように記、四一本文、四一—1、五一—2の四つを数える。その他、四一—5は陰神が先に言葉を生じたことを不祥としてもう一度廻り直して陽神が先に言葉を返したと伝えるもので、「天柱」要素は明記されぬもののその存在を容易に想像せしめる伝承である。しかし記とはちがって、やり直しモチーフに伴う「ヒルコ」誕生以下の要素を全く欠く断片的記事で、伝承形

式からいえば四一本文と同系統のものの一部かとも推察され、ここでは特に異伝の一つとしては扱わないこととする。又、五一2も奇妙な伝承で、四一本文と同工にキ・ミ二神が日月、ヒルコ、スサノヲをつづけて生んだと伝えながら、このうちのヒルコを生みなしたのは「陰神先づ喜の言を發ぐ。既に陰陽の理に違へり。所以に、今蛭児を生む」と、国生み条のことに逆のぼつて理由説明を加えるというスタイルをとるもので、その内容から推して記の伝承型に近いものと思われる。今はそれに含めることとしたい。となれば、記紀の伝承中キ・ミ二神の結婚と「天柱」を廻る行為を詳しく語るものは結局、記と四一本文、四一1の三伝ということになる。

さて、この「天柱」をいかなるものとして理解するかは後に詳述するとしてまず、キ・ミ二神の結婚とこの「天柱」廻りの要素とのかわりから問題を解きほぐしてゆこう。まず記の記述に従えば、キ・ミ二神はオノゴロ島に天降りしすぐに「天の御柱を見立て、八尋殿を見立て」たとある。そして「国土を生み成さむ」としてキ・ミ二神は、この「天の御柱」をゆき廻つて結婚しようとするあい、ミ神は右廻りキ神は左廻りときめて廻り終え、ミ神の方が先に声をかけたところ「女人先唱不祥」のために不良児「水蛭子」「淡島」が生まれたと語っている。あらためて高天原にかえつて天神にうかがいをたてるといふくだりは、上でくり返し述べたように記に特長的なイデオロギー的仕掛けにちがひなく、新しい付加要素と思えるのでこれを除いて考えることが可能である。そこでもう一度やり直し、今度はキ神の方が先

に、声をかけて無事に「淡路之穗之狭別嶋」を生んだとするのだが、その際に「淡路島」ではなく、その間にわざわざ「穂之狭別」なる人名に準じるかのごとき別称をはさみこむ点を特に銘記しておきたい。以下記は大八島から追加の六島に至るまで歴史的な島名のほかに男女區別を伴う固有名を一々付与しており、記以外の全ての伝承がむろん無性の大八島生みであるのとは好対照であつて、記が男女人類の誕生に俄然こだわっている点に注目しておきたい。むろんこのことは記がこだわつて「ヒルコ」の誕生をここに記していることも深いかわりがあるのであつて、翻つて紀本文がここで「ヒルコ」のことを語らず生み損じ型をとらないことにも深い仔細があるが、そのことについては後述する。

つぎに記と同工伝承と思える四一1の方から先にふれると、ここでは陰陽二神がオノゴロ島に天降り、「八尋殿を見立つ。又天柱を見立つ。」とあつて、記の伝承とでは御殿と天柱との位置が入れかわつていふことが注意される。その他この伝承で目につく記との相違点といえば、初回の「天柱」廻りが陰神が左廻り陽神が右廻りとされ、やり直した際に陰神が右廻り陽神が左廻りと是正されている点ぐらいである。こうしたことから記とこの四一1伝承はほぼ同工同系統の伝承であることが確認できると思うが、すでに上述のように、この伝承は記のように大八島の島名とは別に人間的名稱を添えるようなことはしていない。この面では紀的な統一にならつて見ることができ。なお、この四一本文、四一1ともに「女人先唱不祥」ということで

「天柱」を廻り直すという筋立てになっている。

さて、ここで既にことわりなく繰り返し記述していることでもあるが、以下の大きな問題提起ともかかわることなので、ついでに言及しておけば、以上指摘してきた記紀間の傳承上の差異もさることながら、より大きな差異を示すものではないかと思われることは、この部分の神話の主人公を記が一貫してキ・ミ二神で提示しているのに対して、紀の傳承すべてが、オノゴロ島上への天降り以後陰陽二神をその主体として語ろうとしている点である。むしろ大八島の生り出で順については、「表II」にみられるように各伝で異同があるがそれはさておき、記が主人公を一貫してキ・ミ二神でおし通しているのに対して、この部分に限って、紀の傳承全てがその主人公を陰陽二神として統一的に記述している点に注目したい。ここでの国生みが終ってつづく神生みの条に入ると各異伝ともども又もとのキ・ミ二神へと戻るのである。このことについてはすぐ後で詳述する。

以上のごとく、「天柱」をめぐる三つの傳承型も結局は、記型と紀本文型の二類型に分けうると考えてよいであろう。ということになればその二つの傳承間の大きな差異はこの箇所での「ヒルコ」要素の有無ということに集約されようし、逆にそのことに問題点が象徴的に示されているともいえる。記のここでの「ヒルコ」傳承に対して、四―本文傳承がそれとは全く異なる文脈で、つづく神生み条にこの「蛭児」をとり込んで日月神とともに出現させていることは周知のことだが、双方の傳承位置のちがひも含めて、この「ヒルコ」傳承について

は次節で重点的に検証を加え詳述するとして、ここでは簡単に結論にのみふれるにとどめておきたい。というのは、この生み損じ型のヒルコ要素は記に特有の兄妹型始祖神話に固有の要素であって、一方の紀本文型の傳承がこの要素を含まぬように、このヒルコ要素は目下の検証対象たる国生み神話とは本来無関係の要素と解しうるからである。結論を先だてて言えば、この大八島生みという国生み神話の基本型は中国古典籍にみられるようなキ・ミ二神あるいは陰陽二神といった巨人的な対偶神が「天柱」なるものの周りを廻って次々と島生み国生みをなすといった雄大かつ単純な神話型式に則ったものと考えられる（なお後述）。紀の本文がここで「ヒルコ」を出さないのはこの箇所では国生み記事に徹しようとしたからであって、予めそうした矛盾要素をとり除いて展開しようとしているからである。しかしにもかかわらず、紀は記のヒルコ傳承型の根づよさについていひきざられて、廻り直しの要素だけは残してしまった、これが紀本文の成文化のプロセスであったと考えられる。これに対して記はこの国生み神話の深層に、キ・ミ二神的な兄妹神が近親相姦を敢て犯すことよって人類の始祖となるという類の神話型をしのびこませ、国生みに人類始祖を絡ませることで国生み傳承全体を構成しようとしたといえる。記はその創世において、神話を歴史として語る上で、国土創成を語りつつ、同時に人類の起源を語ることを不可避のことと見たのであって、いわば国生み神話を表層にしてその深奥にひそかに人祖傳承をしのばせることで、神話という歴史的物語りの端緒を切り拓こうとしたのだといえる。記



の伝承中の「ヒルコ」と「八島」の同居はそのことを象徴しているが、同時に上で注意を促しておいたように、そうした矛盾を解消すべく「大八島」の島名のそれぞれに人間的な固有名を付与したものとかわれ、異質な名称の同居はその間の事情をよく物語る一つの処置とみることが出来る。

さて、以上のごとく、「天柱」の廻り、直しと、「ヒルコ」誕生モチーフ、それとキ・ミ二神という神名をも含めてこれらは兄妹相姦型人祖神話の主要素と思われ、後に一括して論じるとしてここではそれらを除いたもの、すなわち陰陽二神の「天柱」廻りと大八島国の創成というこれら一連の主要素について考察を進め、記紀神話編修の現場に立ちあいつつ、それぞれの初源型式をもとめて徹底した分析を加えることとしよう。

まずこの神話を担う主人公の問題から。記はいうまでもなくその冒頭から一貫してイザナキ・イザナミ二神を主人公として話を展開しているが、上でも若干ふれておいたように、紀ではオノゴロ島生成までは、このキ・ミ二神を主人公としておきながら、オノゴロ島上での二神の聖婚から大八島生みに至るまでの部分に限って、本文以下すべての伝承こそそのキ・ミ二神の役目を陰陽神の役まわりとしてその名を入れかえて登場させているのである。記紀間でのキ・ミ二神と陰陽神という主人公名称のちがいのことながら、紀の本文内で四一本文以下の陰陽神を主人公とする部分と、その他のキ・ミ二神を主人公とする部分とに分けうるということ自体異例中の異例に属すること

である。入り交って共存しているのではなく、互に全く交叉することなく並行しているのである。さらには又、紀五一本文の山川草木を生みなす神生み条以下では再びキ・ミ二神を主人公とする形へと戻るのだが、奇妙なことにも上でも少々引用した五―二伝承中の、本来国生み条中にあるべき「ヒルコ」が生まれた理由を説く箇所では、ごくごく微量の引用部分であるにもかかわらず、そこで再び陰陽神表記へと戻っているのである。ごく短いいわば挿入部分といつてもいい部位で、整合性のある一貫表記が簡単に可能であるにもかかわらず、敢てそうした矛盾をそのままにして露出させていることの意味は何か。こうした点を考え合わせると、一連の大八島国生みの伝承がより本来的には固有名をもたぬ一種の陰陽二神をヒーロー・ヒロインとしてもつばら語られ書承されていた神話であつたらしいことを強くうかがわせる。

つまりキ・ミ二神名表記による統一がなされる以前、この大八島国生みを本体とする神話は元来、陰陽二神という抽象的な対偶二神を主人公に語られ表記されていた神話であつたとの理解が可能なのである。さてここで改めて該神話部分の本体たる国生み神話の祖型を確認しておきたい。その神話の本態はいたって簡單明瞭なものである。すなわち、陰陽二神はそれぞれ左右からこの「天柱」の周りを廻りつて遭遇しそして結婚し、つづいて「淡路洲」を「胞」として「本州」をはじめとして次々と大八洲を出産した、というものである。目下のところ、すでに上で関説した点もあり、又以下で更に詳しく論証すべき諸点もあるが、ここでもう一度あえて重複を承知でこの国生み神話にま

つわる諸要素について若干の整理を試み、問題の所在を明らかにしつつ先へと論を進めたい。すなわち、「天柱」の廻り、直しの要素、それにくどいまでの男女性器の、違いの確認の要素、そして結婚、そして「胞」を媒介に次々と国を生むという要素、傍点をふつたこれらの諸要素に共通するのは結婚という一つの事態をめぐってであって、これに記の「ヒルコ」要素をつけ加えてこれら諸要素は全て、兄妹相姦始祖を語る神話に固有の諸要素であったと想像されるものである。この二人の主人公が兄妹であったか、あるいはそれゆえの生み損じとしての不良児を伴うものであったかはさておき、紀本文伝承にみられる陰陽神も、陰陽であるという理由から結婚するという要素までを除外して語ることができなかつた。そこに紀本文までもが結婚に固執した理由があつたのだろうし、記の伝承の「ヒルコ」に代わるものとして「胞」が入り込んでくる余地があつた。人間的な「ヒルコ」と、巨人的に島を「胞」とすることの連関はかくのごときものであつたと想像される。紀本文にみられる陰陽神は人間的な存在ではなく、いわば世界巨人とみなしうる存在であつて、従つて結婚なり「胞」といったような要素を欠く話であつても当然かまわないし、むしろ超越的な宇宙にかかわる存在として、即物的な性は不問に付されてこそふさわしかったかも知れない。にもかかわらず、男女の性差のなものをいろいろとにおわせているのも、これまで述べてきたような事情が深く絡んでのことであつたと思われ、これらの諸点については以下でも様々に関説される中で、更なる緻密な検証が試みられてゆくはずである。

さてここで、紀の伝承中の一大要素である「天柱」を祖上にのせて詳しく検証してみよう。上述してきたところからも明らかのように、大八島国という国土創成の本来の主体が陰陽二神に確定しようとするれば、次に問題となるのは「天柱」とは何かということである。そして、この「天柱」と陰陽二神との本質的な関係如何という問題である。前後の文脈に即して、この「天柱」なるものがいかなるイメージや世界観をもつものであるか、以下でその試解を提出してみたい。

この「天柱」は記では「天之御柱」としてあらわれ、これとすぐ下の「八尋殿」の大黒柱的なものと結びつけて考えるむきもあるが、多くの注釈書も説くように、この種の一見合理的解釈が神話的観点からいつてまず大きく的をはずした失考であることはいうまでもない。四一一の「八尋殿」を見立てて後で「天柱」を見立てたとするような伝承もすでに当時からそうした再解釈の罫にはまる傾向があつたことを如実に示している。この場合、紀四一本文が、キ・ミ二神がオノゴロ島に天降りするやすぐにこの島自体を「国中の柱」としたとする伝承がこの「天柱」の本来の性格を自然に表出していると思える。この「国中の柱」は婚姻のための宮殿建設などとは一切関係なく、陰陽二神がこの「天柱」の周りをすぐさまそれぞれ左右から旋回するとうように話がすすむ。おそらくこのオノゴロ島そのものを「国中の柱」として陰陽二神がその周りを廻るという単純な形式こそがこの神話の一番の祖型であつたと思える。そうした意味での「天柱」は世界の中心にある柱としてコズミックなイメージをもち、世界のはじまり

を説く創造的原基としての役割を担うものとしてある。いわば世界の臍へそにそりたつ一種の世界の枢軸として立ちあらわれ、大八島国創造の前提をなす大八島のみえざる中心あるいは中軸としての機能をはたすべく、まずここに立ちあげられていることが容易に感じとれよう。

こうした「天柱」イメージの参考となるものに、例の天橋立の地名の由来をとく、このイザナミが天を地を往き来するために「天梯立」を作ったとする『丹後風土記』逸文中の伝承もある。あるいは又、この後続の五―本文でもキ・ミ二神が日・月・スサノヲ三貴子を生んだ折、この日・月神をこの「天柱」をたどらせて天上に挙げたとする伝承もある。また、オノゴロ島を「国中の柱」となす考え方は、記の大八島生みの追加記事中にみられる伊伎島の別称を「天比登都柱(天一柱)」としていることに相通じる観念でもあろう。また、西郷注釈が正当に説くように、より記に即していえば、この「天の御柱」は上接文脈中の「天のヌボコ」「天の浮橋」に相通じ、それらは同種のリズム構成をなすものであって、この「天の御柱」が大八島殿の柱であるはずもなく、キ・ミ二神が行き廻つて大八島を生むための柱であると思われるべきだとするのは神話を讀みとく姿勢としてごく自然なものである。この種の解釈は夙に『釈紀』の古説に云うとして「天神所<sub>レ</sub>賜瓊矛。既探<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>馭<sub>ニ</sub>廬<sub>ニ</sub>島<sub>ニ</sub>畢。即以<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>矛<sub>ニ</sub>衝<sub>ニ</sub>立<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>島<sub>ニ</sub>。為<sub>ニ</sub>国<sub>ニ</sub>柱<sub>ニ</sub>也。即其<sub>ニ</sub>矛<sub>ニ</sub>化為<sub>ニ</sub>小<sub>ニ</sub>山<sub>ニ</sub>也」と見えていると紹介されてもおり、時代を超えた神話解釈の一つの範型パラダイムを示している。

以上をまとめて、記に即してより神話的に敷衍していえば、「天の

ヌボコ」が「高天原」を原郷としてそこから指し下ろされた大地II大八島国の中心に向けての垂直的な基軸の動的なメタファーだとすれば、キ・ミ二神が「天の浮橋」に立つて、この「天のヌボコ」を媒介にその真下にいわば大地の臍へそとして生み出した「オノゴロ島」とそこに宿つたポテンシャルエナジーな力は、それを根生いに真逆に反転して屹立する「天の御柱」をささえ、「天のヌボコ」「天の浮橋」を貫きとおして上昇する動的でシンボリックな天地の枢軸のまさにメタファーといつていいものであろう。オノゴロ島上に衝き立つた「天のヌボコ」II「天の御柱」はそれを中軸に生み出された大八島国の地ゲニクス・ロキエチの靈の力を求心的にこの地軸のもとに集め、それを空のかなたの「高天原」へと指しむけるために可視化された一種の宇宙軸コスモス・ツクアクシスだといつていいであらう。少くともこの「天の御柱」のうちにはこのような創造創成の原理原基としての神話的な世界観が孕みこまれていることをはつきりと認識すべきであらう。

ところでくだくと「天柱」の宇宙的性格について述べたててきたが、上で確定しえた陰陽二神が、こうした「天柱」の周りを廻るといふ高度に思弁的な天文学的な神話類型はいかにして生まれたかが次の問題である。すでに上述したところだが、この陰陽二神が「天柱」を巡行し創造行為をするという宇宙論的神話は、中国伝来の思想に基づくとする説がすでに津田左右吉や白鳥庫吉以来ある。今日でもこの主張は全面的に肯定されるべきものとも思われ、事実この説を継承する中国古代史家も数多い。<sup>(10)</sup>中でも中国古史思想家鉄井慶紀は、M・エ

リアーデなどの中心のシンボリズム論を援用しつつ、この「天之御柱」の天上世界の到達点こそ「天之御中主」のいる「高天原」世界なのだとするなど、記紀神話との関連において種々示唆に富む論を展開している。洪水兄妹型始祖神話のわが国の存在を肯定する大林太良も、この神話中の「天柱」旋回要素に注目して、宇宙の中心の柱を巡る行為は天体の運行を模倣再現するもので何らかの世界創造にかかわる営為を示すものと、そうした側面をも積極的に認取しようとしている。<sup>11)</sup>

ところでこの「陰陽」「天柱」「右旋左廻」などの諸要素は、中国古典史あるいは古代文化史家の多くがしばしば説いてきたように、『淮南子』『白虎通』『枕中書』『春秋緯』『神異経』などを始めとして道教関係の書物を中心に広く中国古典籍にみられる典型的な観念であって、紀の冒頭部の『淮南子』などを参照した部分などの指摘をまつまでもなく、とくにこの種の高度に思弁的構築的思考などの面においては、そうした諸書に依拠しつつ自らの思考形式なり枠組みを形成していったであろうことが容易に想像される。このあたりの論証については詳しくは白鳥庫吉や飯島忠夫の論著にゆずるとして、<sup>12)</sup> 道教思想を中核に、天―陽―男―左旋、地―陰―女―右旋とする観念が根強く、大地あるいは女神が右周りをするという形式がみられるが、このことは大八島生みが時計周りに進むことと方向的に一致して興味深い（なお次節で後述）。

ところで中国古代において、宇宙のありかたを基礎づける考え方と

して、陰陽五行思想なるものがあつたことはよく知られている。一切の万物には陰と陽の対立する二つの精気があり、五行のうち木と火は陽に金と水は陰に属し、その中間に土があつて、そうした二気が和合することによって、万物万象が造化創成されるとみる一種の世界観である。わが国にもそうした思想が早くに伝来し、令制官司の一つに陰陽寮がみえるように、記紀編纂当時の社会にすでに広く深く浸透していたことを明瞭に示しているが、改めて指摘するまでもなく記紀テクスト上にその種の思想の定着のあとを認取することは極めて容易である。すぐ上で述べたキ・ミ二神を陽神陰神二神といいかえていることもその例に入るであろう。天体や宇宙のありかたに関心をつよい道教が大化前代に伝来し、七世紀後半に神仙思想として盛行し天皇<sup>グノイスマ</sup>神格化にも一役かつたことはよく知られているが、宇宙のはじまりや世界の起源を説こうとする記紀のこの神話部分にそうした思想が深刻な影響を与えたことは、中国古典籍による出典論をまつまでもなくもはや自明のことに属するといつてよい。上でのべた紀の冒頭部はもとより、記の序文もそうした性格を色こく示しているし、『古語拾遺』の跋文や『釈紀』所引の私記でもすでに中国古代の盤古神話のことに ついて触れられてもいた。このキ・ミ二神の神話と伏羲と女媧の神話との類縁性についても、洪水兄妹始祖神話との関連も含めて様々な形で触れられて来てもいる。<sup>13)</sup> こうした点についても若干次節でも触れることになろう。

ここで一応、中国古典籍等による「天柱」の吟味およびそれにまつ

わる論及をきりあげて、次節ではこの国生み神話部分の深層に潜む兄妹相姦神話に焦点をあて、とりわけその要をなす「ヒルコ」要素を中心に詳しく分析を加えてみたい。

さて最後となったが、この「天柱」なる要素をこれまで紀本文型の国生み伝承にほぼ密着するものと見なして話を進めてきたが、果たしてそう見なしうるかどうか若干の検討が必要であろう。この「天柱」要素が記に潜在する兄妹相姦神話とも深く連動しているかに見えるからである。そこで、この「天柱」をめぐる旋回のやり直し部分に着目して考えてみよう。この「天柱」の廻り直しは、「女人先唱不祥」によるとされあるいは、左尊右卑にかなった旋回をしなかつたことにその理由が求められていた。こうした儒教的あるいは道教的思想などによる理由づけが、神話のキー要素として本来の本質的なものでありえぬことはいうまでもない。となれば、この「天柱」を廻り直すことそのものの本質的な理由とは何か。それはキ・ミ二神の結婚形態そのものの裡に潜むタブーに起因するものであつて、そう見定めることで問題の全ては氷解する。すなわち、この世界にとり残された二人の兄妹はその不可避な近親婚というタブーを犯さざるをえず、それゆえに一度は子産みに失敗し、再びやり直すというモチーフがその前提としてあるのだ。「天柱」の廻り直しというトリックな装置はまぎれもなくこの生み損じ要素と連動しおり同時にそれは、キ・ミ二神にまつわる兄妹婚的タブーを醜化しその克服を促す一種の聖化のための儀礼として援用されていることはまちがいない。そうしたインセスト・タブー

ーとしての色彩を縮減する装置として「天柱」の廻り直し要素は転用されたのだと。

この種の婚姻儀礼的な側面に次第に力点を移すに従つて、この「天柱」廻りは婚姻儀礼に一環する不可欠ないわゆる「ものの周りを廻る習俗」として積極的に捉え直されてゆく。この「ものの周りを廻る習俗」は本来農耕における豊穰儀礼であつて、それが「豊饒」観念を共有するところから婚姻儀礼の一環に組みこまれたと解釈されたりもする。しかしこの「天柱」あるいは「天柱」廻りは果してそうした類のものであろうか。そもそも「ものの周りを廻る習俗」としてそこに儀礼の反復性が認取されるや、陰陽二神の「天柱」廻りに初源的に伴つていた一回性的な世界の創出やその示現といったダイナミックな性格がたちまちに見失われてしまおう。本来この種の神話は文字どおり天地を貫く「天柱」というこの枢軸を、天地を体現する陰陽二神が右旋左廻することによつて、融合的に大地が生成されるといったそれであつて、この場合の「天柱」廻りは婚姻儀礼といった矮小化されたものの中に決して回収しえぬ宇宙観なり世界観なりを包懐している。こうしたイメージが先験的にある中で、あえて記がキ・ミ二神に人祖としての性格を読み込むことで、世界の中心としてのオノゴロ島がキ・ミ二神の聖婚の場となり、世界の地軸としての「天柱」廻りが、キ・ミ二神の婚姻儀礼に一環する「ものの周りを廻る習俗」と化する。この国生み神話に限つて言えば、記を構成する神話要素は巧妙にそうズラして読みかえられ、再度位置づけ直されることによつて成立している

といつていい。こうした点についても、ヒルコ神話を検証する際に改めて閲読することになるが、記紀伝承間でのこの「ヒルコ」要素の出現位置の全き相違が象徴するように、次節では一元化しえない二つのヒルコ神話の存在について詳しく触れてみよう。(この項つづく)

〔注〕

- (1) この六島追加記事が遣唐使の南路と深くかわり、これが開発された七〇二年以降の記述を示すものとみる荻原千鶴の提言がある。荻原千鶴『日本古代の神話と文学』、塙書房、一九九八年。
- (2) このことに言及する中国学者は数多い。さしずめそうした学者の代表格は、白鳥庫吉『神代史の新研究』、岩波書店、一九五四年。ほかに出石誠彦『支那神話伝説の研究』(増補改訂版)、中央公論社、一九七三年。広畑輔雄『記紀神話の研究』、風間書房、一九七七年、など。
- (3) 岡正雄他『日本民族の起源』、平凡社、一九五八年。松前健『日本神話の新研究』、桜楓社、一九六〇年、同『日本神話と古代生活』、有精堂、一九七〇年。大林太良『日本神話の起源』、角川新書、一九六一年。西田長男『古代文学の周辺』、桜楓社、一九六四年。西郷信綱『古事記研究』、未来社、一九七三年。益田勝実『秘儀の島』、筑摩書房、一九七六年。伊藤清司『日本神話と中国神話』、学生社、一九七九年。福島秋穂『記紀神話伝承の研究』、六興出版、一九八八年。ほかに、小島瓊禮、服部且論文など。
- (4) 津田左右吉『日本古典の研究(上)』、岩波書店、一九四八年。松村武雄『日本神話の研究(第二卷)』、培風館、一九五五年。荻原浅男『記紀所収の日月眼生伝の一考察』、『古事記年報(二)』所収、一九五三年八月。広畑(2)前掲書。鉄井慶紀『中国神話の文化人類学的研究』、平河出版社、一九九〇年。
- (5) 津田、白鳥、松村、松前、大林、出石、広畑、鉄井ら前掲書。貝塚茂樹『神々の誕生』、筑摩書房、一九六三年。藤堂明保『漢字と文化』、徳間書店、一九六七年。白川静『中国の神話』、中央公論社、一九七五年。小南一郎『中国の神話と物語り』、岩波書店、一九八四年。N・ナウマン『哭きいさちる神』、言叢社、一九八九年、ほか。
- (6) 広畑(2)前掲書。松村(4)前掲書。松前健『古代伝承と宮廷祭祀』、塙書房、一九七四年。
- (7) 松村(4)前掲書。
- (8) 大林(3)前掲書に詳しい。松本信広『日本神話の研究』(東洋文庫版)、平凡社、一九七一年。
- (9) 松村(4)前掲書。
- (10) 注(5)の各著書参照。
- (11) 鉄井(4)前掲書。N・ナウマン(5)前掲書。大林太良『神話と民俗』、桜楓社、一九七九年。
- (12) 白鳥(2)前掲書。飯島忠夫『日本上古史論』、中文館書店、一九四七年。
- (13) 関一多・中島みどり訳注『中国神話』(東洋文庫版)、平凡社、一九八九年。松前(3)前掲書。谷野典之『女媧・伏羲神話系統考』、『東方学』59輯所収、一九八〇年一月。